伯母さんのうち

髙野敦志



目次

伯母さんのうち

伯母さんのうちは、下町の込み入った路地の奥にあった。母の姉の嫁とつぎ先だったので、子供の頃はよく遊びに行ったものだ。伯父と伯母、伯父の母とその妹、従姉いとこの五人家族だった。呼び鈴を押すと、生け花の師匠だった、粋に和服を着こなしたおばあさんが出てきた。伯父の母の妹で、伯父の母とはいつも、「きんさん」「ぎんさん」みたいに張り合っていた。それに負けじと鳴くのが座敷犬のチンだった。

手前が家族の集つどう居間で、奥がおばあさんたちの城だった。そこには歌舞伎の団十郎や玉三郎の写真から、美人画を元にした押おし絵え羽は子ご板いた、奴やっこさんの和凧、浅草寺の雷除よけの御お札ふだなど、江戸情緒が漂う別世界だった。従姉が踊りの稽けい古こをさせられてる写真もあり、火鉢に載せられた釜からは、いつもほうじ茶の香ばしい匂いが漂ってきた。おばあさんたちが生まれ育った世界が、タイムカプセルみたいに保存されていた。

伯母がなぜこのうちに嫁いできたのか。そこには映画のような物語があった。戦時中、伯母と恋仲となった大学生は、学徒出陣で海軍に入隊した。ミッドウェー海戦で南方の制空権を奪われた日本軍は、敵艦に体当たりする神風特攻隊を組織し、成人して間もない若者を募っていた。上官に指名されれば、いやとは言えない。一人息子だった伯父も、母や恋人に後ろ髪を引かれながら、特攻隊に志願することになった。

突撃する一週間ほど前、伯母は花束を持って伯父に別れを告げに行った。もう二度と会えないと思うと、胸が引き裂かれそうになった。そして、終戦。あと数日戦争が続けば、伯父も敵艦に体当たりして、海の藻も屑くずと消えるところだった。思いも掛けない生還と再会。島尾敏雄の「出発は遂ついに訪れず」と同様のドラマがあったのだ。

念願の結婚となるはずだったが、事はやすやすとは進まなかった。伯母の父、僕の祖父が闇市でメチルアルコールを飲まされ、四

十半ばの若さで急きゅう逝せいしたからだった。働き手を失った僕の祖母は、結婚に断固として反対した。一家の家計は伯母の給料に頼っていたからで、妹二人はまだ女学生だった。そこで、伯父と伯母は、会社の役員を仲介にして、両家の交渉を頼むことにした。

　床の間には伯母が生けた花が飾られていた。稼ぎ手がいなくなるのも困るだろうと、伯母の給与の半分は実家に入れるという妥協案が示された。

「跡取り娘なんだから、嫁にやるわけにはいかない！」

　強硬に反対した祖母は、生け花を持ち上げると、「こんなもん」と言って庭に投げ捨てた。交渉は決裂した。伯母はすぐに家を出たかったが、大おお店だなだった伯父の家も、空襲で灰かい燼じんと化していた。

「うちも焼けて、何もなくなっちまったけど、身一つでおいで」

　伯父の母の温かい言葉で、疎開先のアパートに転がり込んだ。それから幾年かは、実家とは縁を切ったような状態だった。

　ただ、苦難の道はさらに続いた。初孫が産まれるというので、家にお産さん婆ばさんがやってきた。難産でなかなか産まれてこない。昭和二十年代は、帝王切開などまれだった。ようやく産まれてきた男の赤ちゃんは、すでに息絶えていた。

　しばらく子供ができることはなかった。数年の月日が流れ、再び伯母は出産の時を迎えた。今度は元気がいい女の子が産まれた。ようやく授かった命に、伯父、伯母、二人のおばあさんの愛情は注がれた。僕が子供の頃の記憶にあるのは、一家に幸福が訪れた頃の情景だった。

　従姉は多くの衣服や玩具おもちゃを買ってもらった。その中には、僕のうちでは決して与えられない高価な物もあった。ミニチュアの家には、本物そっくりに作られた、親指ほどのテレビや洗濯機、掃除機などが備わっていた。衣服の一部はお下がりとして、僕に与えられたのだが、家で洗濯したときにびっくりした。シャツの裏側には、魔物から守るための御札が縫いつけられていたからだ。

　平穏な歳月が流れていった。従姉が成人するのを見届けたのち、

二人のおばあさんはこの世を去っていった。新築した家は半世紀が経ち、江戸情緒が漂っていた部屋も、おしゃれな洋室に変わっていた。特攻隊の生き残りだった伯父も、白い顎あご髭ひげを蓄えた仙人のような姿になっていた。八十半ばまで生きたのち、妻と愛まな娘むすめに看取られて息を引き取った。にぎやかだったうちも、伯母と従姉、それに数代目の座敷犬だけになった。

　九十歳を迎えた伯母の心配は、二人の妹の病状だった。東日本大震災と東北沿岸を襲った大津波、福島第一原発の爆発と放射能汚染、妹たちの認知症がそれと関わりがあるかは不明だった。

「何で二人とも、こんなふうになったんだろう」

　お正月やお彼岸に集まって、ごちそうを並べて歓談したのも、今では遠い記憶となった。下の妹も亡くなり、上の妹、つまり僕の母も、認知症を患わずらった上に車椅子での生活となっていた。

　その頃、世界中に未知のウイルスが蔓まん延えんした。大型客船から感染が広がるや、店内のマスクや消毒薬が消えていった。人々はマスクを買い求めるために、薬局の前に長ちょう蛇だの列を作った。大学生は入学しても構内に入はいれず、小・中・高の行事もすべて中止となった。在宅勤務が広がり、職場での会食もなくなった。外出や移動を慎むように言われ、四六時中マスクをするようになった。マスクをしているから、人の顔が覚えられない。他人と話すこともなくなり、人と人の絆きずなも失われていった。思い出を作ることができず、灰色の時間が延々と流れていく……。

　家に閉じこもった人々は、ストレスが発散できなくなり、日々の不満を家族にぶつけた。友人との交流もなくなり、会うのをひたすら拒こばむ相手を、疑心暗鬼の目で見るようになった。

「通勤電車に乗ってるから、無症状感染してるって言いたいんだろ！」

　吐き捨てるように電話を切って、テレビをつけると、放送してるのはウイルスのニュースで、「ワクチン、ワクチン」と接種を促す声ばかり。

　そんな中でも一度だけ、車椅子の母を自動車に乗せて、伯母さん

のうちに連れていった。普段は電話をかけてきても、伯母は僕の母とは話したがらない。姉のことが誰だか分からず、ろくに返事もしない妹を思うと、悲しみがいや増さるからだった。
　あれだけにぎやかだった正月を、懐かしむかのように、テーブルには食べきれないほどのごちそうが並べられていた。九十半ばになるというのに、伯母の話は止まらない。テレビに出したらびっくりされるんじゃないか。アナウンサーでも言い負かしてしまうほど、頭の回転も速いし、止とめ処どもなく言葉が出てくる。
「この人もしゃべらないと、認知症だなんて分からないわね」
　言うことがすべてトンチンカンな妹であっても、ご機嫌な顔してごちそうを食べてるのを見ると、昔の楽しかった思い出がよみがえって、心が和なごんできたのだろう。
「伯母さんは本当に元気だね」
「私だって、いつ逝いっちゃうか分からないわよ」
　冗談交じりで話している顔が、今でも脳裏に浮かび上がる。実際に会って話したのは、これが最後になった。

　インターネットには、特別承認されたワクチンについて、さまざまな情報が流れていた。海外では副作用で亡くなった人も出ているらしい。それについて、伯母に電話で話すと、「私もそんなもん打ちたくないわよ」という答えが返ってきた。
　ところが、しばらくして連絡したとき、「予防接種をした」という答えに、僕は「どうして」と言葉を詰まらせた。感染したら大変だと医者に言われ、不本意ながら打ってしまったようだった。何ともない様子だったが、数日後、伯母は倒れて病院に運び込まれた。ひどい出血をして、ふらふらして立ってることもできない。
　輸血してもらうと持ち直したので、自宅に戻って普段の生活を続けた。ラーメンなど好きな物を食べていたが、トイレに入ったまま出てこない。脳出血を起こしたらしかった。緊急入院して脳内にたまった血液を抜くなどしたが、ついに回復することなく亡くなった。
　伯母さんのうちには、従姉と座敷犬だけが残された。仲良く暮ら

した家族は、仏壇の位い牌はいに祀まつられていた。もはや笑い声も、母と娘で言い合う文句も響かない。時折、思い出したように座敷犬が鳴くばかり。

　家族が消えてしまった居間に、まだ伯母の魂はとどまってる気がした。耳を澄ますと、早口で何かしゃべっている。

「私はもう年なんだから、死んでしまってもしょうがないと思ってたんだよ。長生きさせてもらったからね。ワクチン打ったせいかなんて、私だって分からないんだよ。もうそっとしておいてもらいたいんだ。ただ、許せないのは、まだ若い人たち、小さな子供にも、ワクチン打たせようとしてること。副作用で苦しんだり、亡くなった人もいるっていうのに、日本のテレビや新聞は、ほとんど報道しないじゃないか。安全なのか危険なのか、判断する材料さえ、日本人には与えられていない。私は戦時中、大本営発表に騙だまされて、多くの人が死んでったのを見たんだよ。爆弾が頭を直撃したり、黒焦げになってしまった人もね。その頃とは状況が違うって言うかもしれないけど、やってることは同じだとしか思えない。

ニュースを鵜う呑のみにしちゃいけないんだよ。自分で情報を集めなさい。今は戦争と同じなんだから、自分で身を守らなければ、生き残れないんだよ……」

　がらんとした居間の中で、懐かしい声だけが響いている。それは僕の妄想かもしれないが、伯母は住み慣れた家を、まだ離れがたく思っているようだった。可愛がっていた座敷犬は、気配を感じてるらしく、しきりに伯母の影を捜していた。

あとがき

伯母は大正の末に、旧東海道沿いで酒屋を営む家の長女として生まれた。四女の母とは五つ離れているのだが、その間に生まれた妹二人は、幼児の時にはしかで死んでしまったので、長女、四女、五女の三人姉妹のようなものだった。
伯母は九十半ばになっても頭脳明晰で、身の回りのことは自分で行っていた。認知症を発症した妹たちのことを、常に気遣ってくれていた。その伯母が、新型コロナウイルスのワクチンの二回目接種後に脳出血で亡くなった。高齢だったこともあり、因果関係は明らかではないが、ワクチン接種が何らかの影響を与えたものと思われる。
日本では現在、ワクチン後遺症に苦しむ人が増えている。もし身内で患っている人がいる場合は、ワクチン後遺症に理解のある病院に通わせてあげてほしい。

二〇二二年九月二十三日

髙野敦志